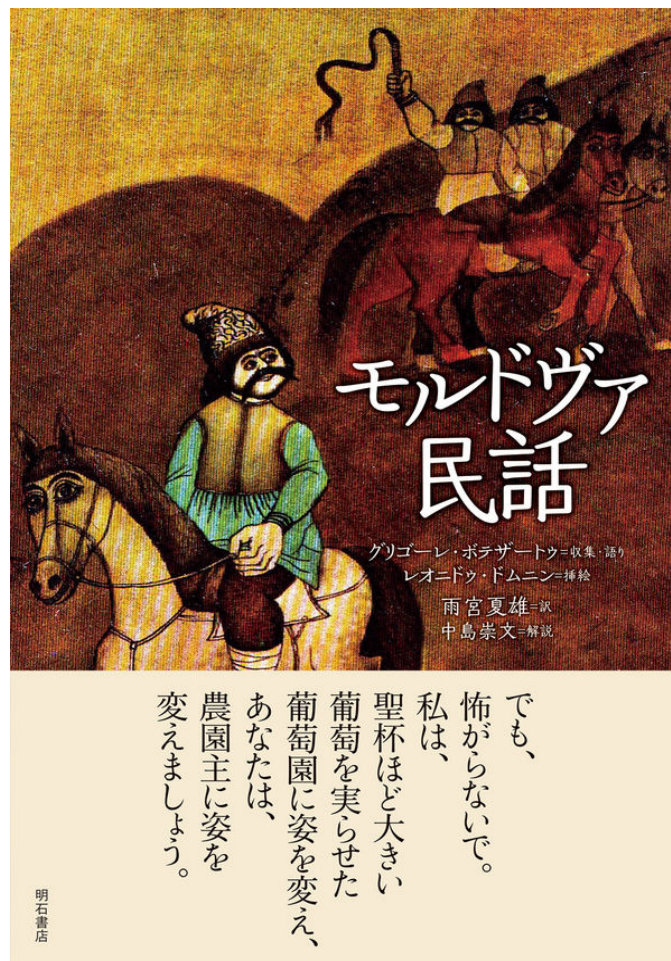


「モルドヴァ民話」邦訳版刊行のご案内

2022年7月

ソ連時代末期の1986年、モルドヴァの首都キシナウで出版された“MOLDAVIAN FOLK-TALES”の日本語版(四六判、368ページ)が、当団体雨宮夏雄顧問翻訳、当団体監事をお引き受けいただいている学習院女子大学中島崇文教授解説により、本年7月15日、株式会社明石書店より出版されましたのでご案内致します。モルドヴァは民話の宝庫と言われますが、古より伝承されてきた物語に触れることは、同国の人々の心の風景に接することであり、多くの皆さんに本書を手にして頂ければ幸いです。



〔モルドヴァ民話へのお誘い〕

モルドヴァ(1990年に国名をモルダヴィア・ソビエト社会主義共和国から、モルドヴァ共和国、通称モルドヴァに変更)は、ルーマニアとウクライナに国境を接する東欧の小国ですが、美しい自然と豊穡な大地に育まれ、豊かな民族文化を形成してきました。この地の人々は、古来よりスラブ人、ハンガリー人、タタール人など様々な民俗の支配を受け、14世紀におけるモルダヴィア公国

(モルドヴァがその一部を構成)建国以降も、オスマン帝国やロシアなど、周辺大国の勢力下に置かれてきました。

モルドヴァの国歌「我らの言葉」の一節に、「炎と燃える我らの言葉／閉ざされた闇の祖国で／人々は眠りから目を覚ます／伝説の中の勇者の如く、とありますが、厳しい歴史を通じ、人々は祖国への思いを物語に託し、世代から世代へと継承し、勇気、希望そして誇りを後世に伝えてきました。長い時を経て口承されてきた様々な物語や伝説に親しむことは、古代、中世から続く人々の生活の息遣いに触れることであり、モルドヴァを知る極めて効果的な方法に他なりません。

今回翻訳し、ご紹介する「モルドヴァ民話」は、グレゴリー・ボテザトゥ編集、ディオニシエ・バダラウ英訳、レオニドゥ・ドムニン挿絵により、モルドヴァの首都キシナウの LITERATURA ARTISTIKA 社より、1986年に出版されました。ボテザトゥ氏(1929年1月14日生)は、モルドヴァ州立大学歴史・文献学部卒業、モルドヴァ科学アカデミー歴史・言語・文学研究所に所属する民俗学者です。長年に亘り、モルドヴァ共和国だけでなく、キロボグラード、ニコラエフ、北コーカサス、オデッサのモルドヴァ村における民間伝承を収集、出版しましたが、その研究成果は高く評価されています。

「モルドヴァ民話」には多くの物語が収録されていますが、本書では、今回13の物語りをご紹介致します。ボテザトゥ氏は、本書「はじめに」でモルドヴァの美しさ、民話の持つ力を、分かり易くかつ美しく解説しています。ぜひ多くの皆さんに、この物語に触れて頂き、モルドヴァの人々や文化に関心を持って頂ければ幸いです。

〔もくじ〕

「モルドヴァ民話」へのお誘い

はじめに

第一話 暁の王子

第二話 宵の明星と明けの明星

第三話 緑の王の息子アリマン王子の物語

第四話 スグルームグル

第五話 スネーク・プリンスと王様の娘

第六話 貧乏なイオンと湖の妖精

第七話 フェザー王

第八話 ハンサムなバジルと太陽の妹金髪のレオノラ

第九話 魔法の馬

第十話 緑の小箱

第十一話 勇敢なドラガン

第十二話 アリスター

第十三話 勇士ヴィサン

解説

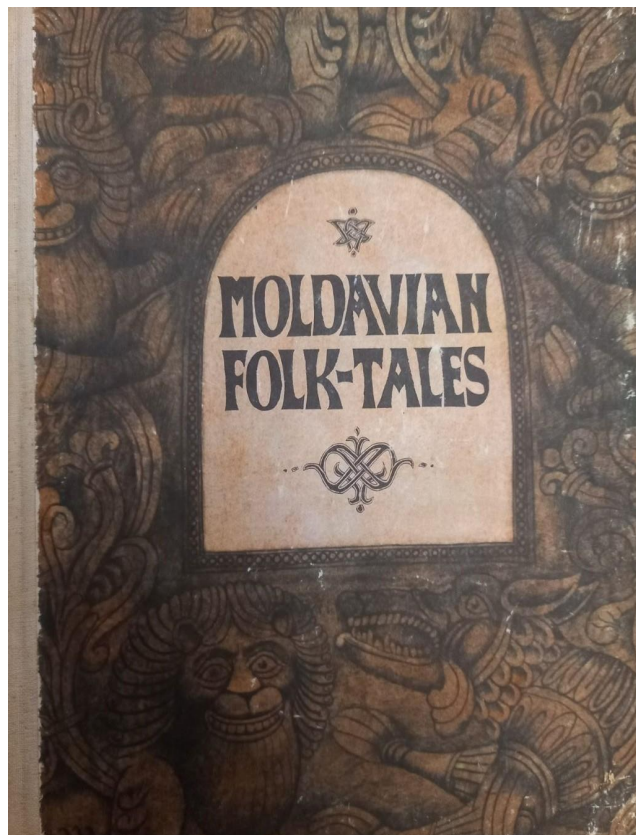
訳者あとがき

〔刊行に際して〕

本書の刊行に際しては、多くの方のご支援を頂戴しました。本書の邦訳をご快諾頂いた原作者にして著名な民俗学者であるグリゴール・ボテザートゥ氏に、心からの敬意と感謝を表します。ただ誠に残念ながら、同氏は昨年12月、享年92歳にして逝去されたとのことで、ご存命中に邦訳版をお届けできなかったことは誠に残念でした。心からのご冥福をお祈り致します。「モルドヴァ・日本文化文明協会」理事長のライサ・プラドツァーヌ女史にも謝意を表します。原作者に加え、挿画作成者レオニード・ドムニン氏（2014年に逝去されたことが後日判明）への交渉等、モルドヴァにおけるいくつかの面倒な連絡や調整を同女史にお引き受け頂きました。

またその他、素晴らしい「解説」をお寄せ頂いた学習院女子大学中島崇文教授始め多くの方々に本書の出版を応援して頂きました。皆様のご支援、ご協力に感謝申し上げます。

原書 “ MOLDAVIAN FOLK-TALES ” (1986年刊)



ボテザートゥ夫人(左)に邦訳版を届けるR. ブラドツァーヌ女史



邦訳版とモルドバジャパンからの感謝状を受け取るボテザートゥ夫人



在りし日の G. ボテザートウ氏とご家族



(以上)